生命保険文化センター賞

おばあちゃんありがとう

北海道　札幌市立北都中学校　二学年　吉村　美玲

「おばあちゃんがね、亡くなったの。」
そう言う母の声は震えていて、目も赤かった。それを見ると嫌でも〝事実〟なのだと理解させられる。そして同時に、どっと押しよせる後悔。
『もっとちゃんと、話しておけばよかった。』
私はおばあちゃんが苦手だった。会うたびに同じ質問、同じ話、同じ説教。最初こそはしっかり対応していたものの、段々と面倒になっていき、目も合わせず、愛想笑いすらせず、「うん。」「へー。」と適当な返事をするようになった自分がいた。
だがある日、おばあちゃんが倒れて入院した。死んでしまうんじゃないかと思うくらい血色の悪いおばあちゃんの姿を見て、もう話せないんじゃないか、と不安になった。死んでしまったら、もう一生その人とは話せない。そんな当たり前のことを今さら思いだして、『次会ったときはちゃんと話そう。』そう思っていた。あんなに思っていたのに。
結局その〝次〟が訪れることはなく、おばあちゃんは天国に行ってしまった。喪失感、悲しみ、後悔が波のように押しよせた。
だけど無情にも葬式、火葬、そして学校と時間が進むにつれて悲しみや喪失感は薄れていった。それでも、『もっとちゃんと話しておけばよかった』という後悔だけはなくならなかった。
ある日、おじいちゃんが家に来た。家族に、特に私に伝えたいことがあるのだと。
おじいちゃんは、実はおばあちゃんが生命保険に入っていたこと、その保険金で葬儀代やおじいちゃんの生活費をまかなえたこと、その保険金の一部を私の学費に使ってほしいとおばあちゃんが言っていたことを教えてくれた。この話を聞いたとき、私は自分を殴りたくなった。おばあちゃんは、自分のこと、残されるおじいちゃんのことだけでなく、私のことも考えてくれていたのだ。それなのに私は、そんな優しいおばあちゃんに冷たく接してしまった。罪悪感とさらに大きくなった後悔で胸が押しつぶされそうになる。『面倒だなんて思ってごめん。ちゃんと話さなくてごめん。』そんな思いがどんどん溢れてくる。その思いを、おばあちゃんに伝えたくて私は父に、「おじいちゃんの家に行きたい。」と頼み連れて行ってもらった。そして仏壇に向かってごめん、と言おう

とした。だけど直前で飲み込んだ。なんだか、おばあちゃんは私が謝ることを望んでいない気がしたから。代わりに私は、「おばあちゃんありがとう。」と言った。私がおばあちゃんに冷たくしても嫌いにならないでいてくれたこと、私のことまで考えて生命保険を選んでくれたこと、他にも色々な感謝を込めて。

私にもいつか、生命保険に入るときがくるだろう。そのときは、自分のことだけでなく、家族のことを考えて真剣に選ぶと決めている。自分が死んだ後も家族や私を支えてくれたおばあちゃんのような人に私はなりたいから。